慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	生の波うつとき： E.ユンガー『内的体験としての戦闘』における生と戦場
Sub Title	Wo sich das Leben wellt
Author	内田, 賢太郎(Uchida, Kentaro)
Publisher	慶應義塾大学独文学研究室
Publication year	2012
Jtitle	研究年報 (Keio-Germanistik Jahresschrift). No.29 (2012. 3) ,p.93- 115
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN1006705X-20120331-0093

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

生の波うつとき

―― E.ユンガー『内的体験としての戦闘』における生と戦場[1)]

内田賢太郎

0．はじめに

エルンスト・ユンガーという、20 世紀をほとんど生き抜いた作家の作品を順を追って見ていくと、1920 年から 1925 年までの最初期の 5 年間は小説であれエッセーであれ、ジャンルを問わず、自身の従軍体験を元に描かれていることが窺える。このテーマはしかしそれに続く 1926 年からは影を潜め、代わって『労働者』（1932）において極まり、また一応の収束をみるような、政治的かつ時局的な論文が量産されていく。このような主題の変化を思えば、ちょうど二つの時期の境にあたる 1926 年になんらかの転換を見たくもなる。実際、この年はユンガーがナポリの〈アクアリウム〉と呼ばれる海洋生物研究所を辞し、研究者から文筆家へと身を転じる年である。そういった事情も決して無視できないにしろ、それぞれの作品を見ていく限り、転換はこの 1926 年に明確な一点として現れるのではなく、むしろ初期の作品において反復され色濃くなっていく、イデオロギーや政治性を纏いもする〈近代戦における技術と人間〉というモティーフに対し、より精密な考察を行うべく試みた結果としての、グラデーションじみた移り変わりとしてあらわれている。となれば重要なのは、変容をゆるやかに押し進め、二つの時期を貫いて考察されるこの技術というモティーフであり、またそれがどのような文脈のうちで語られるかという差異であ

---

1) 本稿は、平成 23 年 6 月 29 日に慶應義塾大学で行われた藝文学会における研究発表「波うつ風景―― E.ユンガーの初期作品における生と戦場」の原稿を元に、大幅に加筆改稿したものである。

ろう。もっとも技術への眼差しは、処女作『鋼鉄の嵐の中で』（1920）では特別強くは見られない。それが考察の対象としてあがりはじめるのは、二作目『内的体験としての戦闘 Der Kampf als inneres Erlebnis』[2]（1922）以降である。そのためこの作品からその後展開されていく技術論の原型を抽出することは、作品ごとの技術論の変容を知るためにも示唆に富むものとなるであろう。

『内的体験としての戦闘』は、前作においては日記体の手法で描いた戦場を「血」、「戦慄」、「塹壕」、「エロス」、「平和主義」、「勇ましき心」、「傭兵」、「対照」、「炎」、「もつれ」、「不安」、「敵について」、「戦闘の前」といった要素から描き出すエッセーである。戦争の出来事や成果を淡々と著した『鋼鉄の嵐の中で』の「補足」[3]、あるいはその「もう一方の極」など[4]、この二作品はしばしば対をなす作品とも見なされてきた。だが両作品の間には、決定的な差異も見出せる。それは戦争についての人類学的アプローチの有無といった、小説とエッセーというジャンルの違いに回収されるもの以上に、描かれる兵士が政治的な像として明確に据えられているか否かといった点に見出せる。『内的体験としての戦闘』におけるユンガーのこの試みは、同時代の同様の立場の著述家に比して、よりレトリカルであり、また犀利にしてきわめて明確な目的設定がなされている[5]。その〈目的〉が「反動的モダニズム」[6]や決断主義の典型例と見なされ[7]、また保守革命的イデオロギー[8]をレトリックのうちにねじこんだ思想と扱われてきた

---

2) テクストは全集（Sämtliche Werke. Stuttgart 1978ff.）第 7 巻所収を用い、引用に際しては本文中にページ数のみを示す。
3) Gerhard Loose: Ernst Jünger. Gestalt und Werk. Frankfurt am Main 1957. S.49.
4) Steffan Martus: Ernst Jünger. Stuttgart/Weimar 2001. S.41.
5) Martus, S.42.
6) ジェフリー・ハーフ『保守革命とモダニズム』（中村幹雄・谷口健治・姫岡とし子訳、岩波書店、2010）所収のユンガー論『エルンスト・ユンガーの魔術的現実主義』（121-192 頁）に詳しい。
7) クリスティアン・グラーフ・フォン・クロコウ『決断 ユンガー・シュミット・ハイデガー』（高田珠樹訳、柏書房、1999 年）
8) 保守革命とは 19 世紀的産物である市民社会に対して、そこで作り上げられた秩序や価値を破壊しつくし、そうすることではじめて、新たな人間存在の

ために、ここで語られている兵士像もその文脈からのみ論じられてきた。しかしこの兵士像は、それだけで片付けられるものではない。というのも、この書の主眼はその「万華鏡的な」[9] 章立てからも伺えるように、近代戦が兵士の生に及ぼす「触媒反応」[10] じみた作用であり、「戦場の背後にある数学」[11] というその「数学」の分析にほかならないからだ。〈兵士の生〉というこの観点から眺めれば、「新しい人類」としての兵士とは、従来見なされてきたような一つの結論としてではなく、分析を通じて現れた一つの可能性として受け止めることが要される。そしてその可能性への考察が熟して政治的作品群における労働者概念へと繋がっていくことは、『労働者』の中で述べられる労働概念が 19 世紀的な文脈を離れて、兵士こそがそのモデルとして据えられていることからも伺える。『労働者』が論じられる際、『内的体験としての戦闘』がそれを読み解くための一つの手引きとして、時に両者の差異も看過され扱われてきたのはそのためである。だがそのような論考においても、労働者概念の原型とみなされる『内的体験としての戦闘』の中で提唱された「新しい人類」たる兵士の生については具体的には論じられず、ニーチェに連なる人間存在のモデルとして系譜づけられたり、ロマン派の先祖返りとして見られたり、保守革命といった思想史の文脈にあてはめられるなど、穏当に片付けられるばかりである [12]。

可能性が生まれうると標榜する当時の思想を差す。市民社会に対する反発という点はその他の保守思想においても共有されるところだが、多くの保守思想がその市民社会的な価値を破壊ではなく、再び構築することに賭けた点で、この二つは峻別すべきものとなる。詳しくは Armin Mohler: Die konservative Revolution in Deutschland 1918-1932. Darmstadt 1989. を参照されたい。

9) Martus, S.41.

10) Willhelm Krull: Im Foyer des Todes. In: Text+Kritik 105/106. München 1990. S.32.

11) Ernst Jünger: Das Abenteuerliche Herz. Erste Fassung. Aufzeichnungen bei Tag und Nacht. a.a.O., Bd.9, S.148.

12) たとえばジェフリー・ハーフは機械という近代の産物の可能性を見据えつつ、近代に対して批判的な態度を取る保守の思想家、作家たちを「反動的モダニズム」と言い表し、ユンガーもその一人として論じている。そのためハーフの分析は、『労働者』に集約されるユンガーの技術論がその中心となり、その際『内的体験としての戦闘』もかなり参照してはいるのだが、この二つ

本稿ではその「新しい人類」としての兵士の生について、とはすなわち、限りなく市民に近い志願兵が、近代戦の中でいかにして兵士として鍛えられ、新時代の理想像にまで彫塑されていくのかを説くユンガーの言説を検討しながら、「新しい人類」の生のすがたを見ていきたい。

1．近代戦

ヨーロッパの人々はただ〈世界大戦〉とだけ聞けば、第二次ではなく第一次大戦を思い浮かべるという。この戦争がそれほどの衝撃をもたらした理由の一つとして、歴史上最初の近代戦であったことが挙げられる。ジョン・エリスは『機関銃の社会史』の中で、第一次大戦が戦争の歴史において決定的な転換点であることを繰り返し述べ、以下のように言う。すなわち、物量戦という語が示しているように、この戦争から戦闘は「数の問題」になってしまい、「個人の英雄的行為」どころか「部隊の英雄的行為すら、何の意味も」[13] 持たないものになってしまった。また「誉れ高き突撃」[14] など、それまでの戦争では主力であった騎兵隊に代表される貴族的な戦いの持つ美徳が、すっかり砕け散ってしまった、と。戦闘におけるこのような価値転換を引き起こした要因として、地雷、毒ガス、それに機関銃などの火器といった大量殺人兵器が持つ意義は計り知れない。それはエーリヒ・マリア・レマルクに代表される、大戦から帰還した者たちの著した戦争文学にも如実に現れている。戦場を覆い尽くす炎は、兵士たちにとって未知のものであり、またほとんど超克しえない体験であった。レマルクの

の作品の視点の違いを看過しているために、20 世紀に再燃したロマン主義にすぎないと結論づけてしまっている。またクロコウはユンガー、C.シュミット、ハイデッガーの三者を決断主義という立場の近似から論じた『決断』の中で、ユンガーの『内的体験としての戦闘』に見る兵士や戦闘のあり方を論じ、その先に『労働者』で展開される労働の概念を見つめる。とはいえクロコウの論調は、三者の近似にばかり向かい、その三者の間にそれぞれはっきりと窺える差異に関してはほとんど触れずにいる。そのためユンガーへの批判も、畢竟決断主義という定式を導きだすための分析という感を否めない。

13) ジョン・エリス『機関銃の社会史』（越智道雄訳、平凡社、1993）187 頁。

14) 前掲書、78 頁。

ように平和主義の立場から戦争を扱った作家にせよ、他方民族主義の作家にせよ、例外なく戦場を焼き尽くす炎を描いているのもそのためであり、両者の相違はそこで無惨に死んで行く兵士の姿を強調するか、炎を市民的な秩序を喰らい尽くして荒ぶる始源の暴力の噴出としてあらわすかにかかってくる。ユンガーの戦争文学もこの例に漏れず、後者の立場を過剰なほどのレトリックによって押し進めたものであり、主張はもとより、言辞や語気まで、市民社会という息詰まるものがこの大戦を境に崩壊するという昂揚に支えられている。ところで、このような感情は開戦時のドイツでは先鋭的な作家はもとより、多くの市民さえ抱いているものでもあった[15)]。第一次大戦が決定的な戦争だったもう一つの理由はここに、すなわち大戦の勃発が閉塞した息詰まる社会からの解放として熱狂を伴って受け入れられた点に見出せる[16)]。逆に言えば、戦争文学では、市民社会の変革という眼差しと、その意志のままに従軍し、技術によって著しく変化した戦闘をくぐり抜けた者たちの体験が挫折形態であれ、ユンガーのように勝敗は度外視した成功物語であれ、語られることになる。そのような共通性を持つ数多の作品のなかでユンガー作品の特異性を挙げるならば、多くの論者が認めるように仮借なく克明な描写とレトリックに、また更には戦闘という忘我の境に突き落とされる体験をきわめて冷静に観察し、その反省的な距離を徹底する点にあると言える。クロコウはその特性を「陶酔と冷徹な考察の絡みあい」[17)] と述べるが、『内的体験としての戦闘』以降強まり、ロジェ・カイヨワをして「かえってこれを誇張しようとした」[18)] と言わしめた技術とその可能性への眼差しもまた、この奇妙に冷めてもいる熱情の思

---

15) 作家の一例としてはホフマンスタールの論文「領域の接触（Die Berührung der Sphären）」やリルケの 1914 年から 1926 年までの書簡を、また当時の人々の感情についてはシュテファン・ツヴァイク『昨日の世界』（原田義人訳、みすず出版、1999）の「1914、戦争の最初の頃」（317-350 頁）をそれぞれ参照されたい。

16) クリスティアン・グラーフ・フォン・クロコウ、53-56 頁参照。

17) 前掲書、63 頁。

18) ロジェ・カイヨワ『聖なるものの社会学』（内藤莞爾訳、筑摩書房、2000）199 頁。

考として受け取れる。

ユンガーは、前近代的な戦法の限界を留保せずに諾う。「このような（引用者註：近代戦の）衝突において、もはや剣を抜いて戦う時代のような、個人の能力ではなく、むしろ衝突する巨大な有機体の持つ能力のほうが考慮されるのだ。生産物、技術水準、科学、学校制度、それに鉄道網、こういったものが物量戦の煙雲の背後で目に見えずして相対立する力なのである」[19] などの記述からもわかるように、近代戦における個人を何ら意味をなさぬものと捉え、組織を構成する歯車となることの重要性を説く。しかし作品を発表する度に、技術と兵士の密なる連関や、組織の拡張をより細やかに述べたてる一方で、たとえば処女作の中で描かれた、機関銃の集中砲火の中、手榴弾を手に単身切り込んでいくような兵士への並々ならぬ好感も、変わらずに見いだせる[20]。ここに見られる兵士の姿、すなわち「誉れ高き突撃」に身を捧げた英雄的行為の担い手の姿は、近代戦を諾うユンガーの戦争観と衝突するようにも映る。近代戦の技術が英雄的な戦いを無効にしてしまった以上、近代戦の戦場で英雄的に戦うことはもはや敗北以外の何も表さないようにも思える。だがこの二つの立場を矛盾させずに綜合する豊穣さこそが、ユンガーが見ていた近代戦以降の兵士の姿なのであり、「新しい人類」もまた、この延長に求められる存在である。

肥大した技術に支えられた凄惨極まる第一次大戦の戦場では、古ヨーロッパの戦いの作法は絶え果ててしまった。しかしだからこそ、歴史上はじめて見えてきた可能性もあった。ユンガーがレマルクの対極にあるとされてきた理由はここに、すなわち近代戦のあまりの無慈悲さに、このような無慈悲な戦いだからこそもたらされる英雄像を見つめ、それを信じた点に求められる。『内的体験としての戦闘』の中で、情け容赦ない、荒々しくも残忍な戦争が、かつて決して存在しなかった男たちをつくりあげたと語られるとき、そこに託されたのは古ヨーロッパ的な戦いの秩序や、既存の英雄のあり方が根絶されたことによって生じる人間であり、また彼らの生である。いまそれを考察するにあたって、ユンガーがそもそも戦争をどの

---

19) Ernst Jünger: Sturm. a.a.O., Bd.15, S.16.

20) Vgl. Ernst Jünger: In Stahlgewittern. a.a.O., Bd.1, S.114.

ようなものとして捉えていたのかを見ていきたい。

2．戦争と地層的思考モデル

ユンガーにとって戦争とは何だったのか。この問いの糸口としてまず眺めたいのは、戦闘は万物の父である、というヘラクレイトスのことばを元に言い換えた、戦争は人類の父であるという、ユンガーの発言である。「戦争、この万物の父は、勿論われわれの父でもある。戦争はわれわれを叩き上げ、彫塑して、われわれがいまあるように固めたのだ」（S.11）、「戦争はただわれわれの父というだけではない、息子でもあるのだ。われわれが戦争をつくり、戦争がわれわれを作る」（S.12）と述べるユンガーは、さらに戦争を「鍛冶屋の仕事場」に喩え、そこで世界は新しい限界と共同体を目指して粉々にうち砕かれると説く（S.73）。戦争がその荒々しい力で鑿やハンマーをふるい人間を作り、そこで作られた人間によって生じる戦争から、また新たな人間がつくられ、人間は徐々に変化していく。

人間や時代の発展には、必ず戦争がつきまとう。このような見解に保守革命派のイデオロギーを見るのは容易い。しかし上の言説においてそれ以上に捉えるべきは、見解の基調を成す歴史の不連続性を強調する一種地層的、地質学的な思考モデルである。ユンガーがこの思考モデルをはっきりと呈示するのは、1928 年に出版された『冒険心 第一稿』の中でだが、『内的体験としての戦闘』においても地層のメタファや、この思考モデルと同様の輪郭を持つ描写は散見される。いまそれに則って述べれば、この地層の根源には戦争に一つの例を取る動物的な、あるいは冒険心を刺激する「野蛮さ」がある。それは地層の根底であるがゆえ、なくなることも潰えることもない。だがこのときユンガー自身も志願兵になる以前は属していた市民社会が、またそこで爛熟した文化が、この地層にいびつな作用を伴って介入してくる。市民社会的な心情とは、動物的な直載性を秘めた根源の心とは異なって、「洗練されたもの」つまり細やかな神経である。そこからつむぎ出される規範や良識は、根源の冒険心や野蛮性をくるみこんでしまい、それらをただ向こう見ずなものと、役に立たぬものとして染めあげる（S.15）。この一連の流れを地層モデルとしてあらわせば、市民社会とは根源の層をくるみこんで、そこに保身という、ちょうど冒険心の対極

にあたる新しい根源をつくりあげ、その上に構築していく社会にほかならない。そのため本来の根源との間には断絶があり、またこの断絶によってこそ成立する社会である。

市民社会への批判は、『労働者』の中でも徹底的に行われる。それに比せば『内的体験としての戦闘』の中で展開される批判は、多分にレトリックにもたれかかってもいる。しかし市民社会が自然にそぐわぬ発展を遂げ、その結果積もらせた歪みを補正しようと働く力が言及されるとき、そこには同様の思考の形が見出せる。それが抑圧と抵抗を主軸とする力学的モデル[21]と峻別すべきなのは、ユンガーはそこに地層の堆積と並んで重要な作用、断層を見出しているからである。

> 比較的深い層の化石に加えられる圧力には、その形状をとりわけ際立たせるように圧しつける、ある一定の度合いのものがある。しかしながらこの圧力は、その度合いがごく僅かにあがっただけで、瞬時にその形を留めぬまでに破壊する。そのため貝や植物の鮮明な痕跡にぴったり隣り合って、岩塊の中、もはや原形を見いだせぬほどに粉砕された化石の欠片を見いだすことがあるのだ。これは相互の層の連関を毫も認められぬほどに粉砕してしまう形状の壊滅が生じたことの証左である。[22]

プレートとプレートは衝突しつつも、そこに働く力は普段は平衡を保っている。ところが何かの拍子にこのバランスが崩れれば、突如として途方もない力が跳ね上がる。地層の形を変えてしまうこの力は、ずっとそこに加わっていた圧力でもあり、植物や貝を化石に変えた力でもあり、またこの地層を形作る根源の力でもある。断層が生じ、地層が持ち上がり、粉々

---

21) 同時代の力学的モデルから戦争を論じたものとしては、S. フロイトの『戦争と死に関する時評』や、アインシュタインとの書簡より成る『人はなぜ戦争をするのか』が挙げられる。

22) Ernst Jünger: Das Abenteuerliche Herz. Erste Fassung. Aufzeichnungen bei Tag und Nacht. a.a.O., Bd.9, S.104.

になった化石と、下の層から押し出されてきた無傷の化石が同一の層に見いだされる。この状態をユンガーは、自分たちの世代と大戦の関係になぞらえているが、換言すればそれは、砕けた方を時代の道徳や信条と、残った方を根源の力とも共鳴する時代精神という生の刻印と見なしているという告白でもある。逆に言えば、粉砕される化石とは本質的ではないものであり、それゆえに戦争は真価を試す試金石としても作用することになる。このような地層モデルの思考を時代や社会のみならず、人間においても見ていくユンガーの考察を追っていけば、彼の戦争観はよりあざやかな線を結ぶ。人間を形作る地層に、断層を引き起こす力が働くとき――それはその生がおびやかされるときに他ならない。その一つの例、同時代の人間が体験した一つの大きな例として、ユンガーは第一次世界大戦を挙げ、こと細かに論じていく。

ところで、断層によって地面に露出した地層が、その地下の層を示すように、また断層が起こる瞬間にだけ、地面を形作る根源の力が体感しうるように、断層とはただカタストロフのみならず、根源に眠るものを深く知る契機ともなりうる。ユンガーが後に第一次大戦を自身の「たぐいまれなる学び舎」[23] と呼び、教育の側面を見いだしているのも、この点と無関係ではない。近代戦の戦場を、兵士の生がおびやかされる空間と捉え、同時にそこに試金石としての作用も認めるとき、この学び舎の持つ〈教育〉は市民社会によって狭められた、人間本来の生の可能性に向けられていく。また「学び舎」という比喩が示唆するように、それはいわば独自の〈教育〉プログラム〉を持つものである。その中で兵士たちは生を認識し、接近し、彫塑されていく。『内的体験としての戦闘』においてユンガーが章立てた近代戦のさまざまな要素とは、いうなればその〈教育プログラム〉の分析である。それが具体的にはどのようなものなのか、以下検討していこう。

3．兵士の変容

近代戦が兵士に与える作用を端的に表せば、市民社会に属する一人間の脱却であり、また職業としての兵士から血統としての戦士へと移行する、

---

23) Ebd. S.98.

その生の変容過程であると言える。戦争に参加した限りなく市民に近い志願兵は訓練によって徐々に兵士として成長し、出自である市民社会とは別の秩序を信奉しはじめる。やがて武具の扱いにも長けて、敵味方入り乱れ火器の炸裂する戦闘も経験していくにつれ、優秀な兵士から新時代の理想像「新しい人類」足り得る存在へとなっていく。このような変容過程を念頭に、それぞれの段階における〈教育〉を見ていきたい。この教育を考えるにあたって肝要なのは、ユンガーの戦争文学が戦闘を主軸として描くばかりではなく、時として牧歌的でもあるほどに兵士の生活をも描いているという点である。シュテファン・マルトゥスは、『鋼鉄の嵐の中で』について、その大部分が戦闘の記述ではなく、陣地や陣営における兵士の日常の出来事であることに着目しているが、それもこの変容と密接にある。戦争の〈教育〉は、ただ戦闘を通じてのみあらわれるものではない。訓練や規律と結びついた、普段からの労働もまた重要なのである。日々の重労働、不眠不休の仕事、極度の緊張といった戦地の日常によって、彼らの体はその神経の側から書き換えられていく[24)]。その中でもユンガーが特に重用視しているものとして、塹壕があげられる。

兵士たちは日夜、戦場のあちこちを掘り続け、塹壕を作る。勿論これは並々ならぬ重労働であり、ユンガーに倣って言えば、市民の肉体でなしうるものではない。しかしそれでもこの作業に携わって掘っていくことで、兵士たちの「根源の深みでまどろんでいたもの」（S.71）である野蛮さが揺り起こされる。この始源の野蛮さによって、それまで彼らの肌を隠していた、市民社会の拵えた衣服は引き裂かれる。彼らの肌はこの野蛮性に覆

---

24) 尚、ここで例に挙げたような兵士の変化に「神経」をはっきりと打ち出すのは『冒険心』の頃であって、『内的体験としての戦闘』では、〈精神に対する血〉といった同時代的なテーマを意識的に踏襲して「血（Blut）」が据えられている。たとえばそれは、『冒険心』においては神経と意識という側面から考察されることになる、塹壕のなかで眠っている兵士が物音をきけば武器へと手をのばす無意識の動きも「血のうちの」ないものかと択えられていることからも窺える（S.29）。「血」という同時代的な思考も勿論重要だが、本論文では、ユンガーの作品の連関を重視して、あえて「神話」と書いたことを付記しておく。

われていき、やがて彼らは思考と行動の密にして直載の結合を得た、市民の信じる理性とは別様の理性を持つ「新しい人類」として生まれ変わる。ユンガーは塹壕を「兵士の巣」（S.31）と呼んでいるが、泥にまみれ、たばこの煙にいぶされ、火酒を呷り、狭さゆえに身を寄せて語り合うここはまさに、こうして生まれた「新しい人間」たちの生活の場であり、また時として戦闘の場ともなる死の濃密に塗り込まれた空間でもある。塹壕を作ることによって兵士たちは育まれていくのであり、塹壕で生活することによって熟していく。ここには塹壕を、兵士を作り上げていく母胎じみた空間として据える眼差しがある。[25)]

保身を信条とする市民たちが望む、確かなものなど何一つとして存在しない戦地で生きる兵士たちは、その生活に適応していくに従って、血液のなかへと浸透する野蛮だが「奥深い理性」（S.79）を知覚しはじめる。しかし留意すべきは、このような始源の野蛮性への没入が、ただ表層的な文明から母なる原始への退行としては捉えきれないという点である。つまりそれは、有能な兵士や「新しい人類」の完成としてではなく、最奥部を充分に見つめ、共鳴し、接近するための前提として語られているのである。

ここで『冒険心』の地層的思考モデルを元に、兵士の生を見ていきたい。この思考モデルの中で、兵士たちの生は地層の中の化石として語られる。兵士たちは塹壕を堀り、その身に「野蛮性の刻印」（S.30）を受けていく。この野蛮性と共鳴し、戦地での生活に没入することでせりあがってくる始

---

25) 塹壕についての記述は、『内的体験としての戦闘』を参照したが、他の初期作品においてもやはり重要な空間として描かれている。たとえば『鋼鉄の嵐の中で』では、塹壕での戦いや、夜警、仲間の兵士の追悼、また戦地でのつかの間の休息など、日記風の文体を用いてこと細かに描かれている。また『シュトゥルム』は、この小説の大部分が塹壕の中での出来事でもあり、とりわけ意味深い空間として立ち現れてくる。市民から兵士、さらには「新しい人類」といった移り変わりを据えた、一種の教養小説めいた相も呈するこの小説では、戦闘の描写もあるにせよ、やや牧歌的な味わいすら残してもいる。だが強調されているのは、この空間が市民社会から脱却した者だけが生活しうる〈巣〉であり、そのような者たちとの関わりから生まれる濃密な交流を内包し、さらにはその強度を高めていく空間であるという点である。

源の層は、彼らの市民的な層を微塵にする。そしてその残骸の中に、実に鮮やかなすがたを保つ化石を残す。崩れた市民的な層と古層が混じりあって形成される層を、ユンガーが呼ぶ〈来るべき時代〉と、すなわち大戦によって明確になった技術時代の層とするならば、市民的なものの瓦礫に隣り合うようにして見いだされる冒険を希う心という生の刻印は、時代と「新しい人間」との関係になぞらえよう。技術時代の層の圧力の中で、この化石は時に削られ、その形を尚のこと明瞭にあらわすのである。

化石というイメージの下で、「新しい人類」はより明瞭な像を結ぶ。しかしそれが化石として語られるのは『冒険心』においてであって、『内的体験としての戦闘』ではまた別の地質学的イメージで彩られている。二つの作品の間には思考の成熟具合の差も見られるが、その根本が変わらないことを思えば、『内的体験としての戦場』に見られるのは「新しい人間」の基調となる、ある種生物学的な人間観と言えよう。

ではユンガーはどのような地質学的イメージに人間を見るのだろうか。彼はまず、人類をもつれからみあって生え、繁茂し続けていく原始林の樹木に喩えて、その外観を縷々述べ立てる。ここで強調されるのは、彼のいわゆる〈生の夜の側〉への傾倒とも繋がる、合理や理知からは遠い人間の姿である。続けて彼は考察の主眼を地面の下へと移し、原始林をなす樹木が軟泥層の腐敗しくずれた樹木からも力を吸い上げていくように、「新たな世代の人類」も、それ以前の「数え切れないほどの種族」の腐敗の堆積の上で成長していくのだと述べる（S.14）。人間を形作るものを地層として眺めれば、それは進化の過程の堆積でもある。すなわち生命記憶のように人間の内で、原人、類人猿から果てはプランクトンまでの動物が堆積することで、人間という一つの地層が形作られる。E.ヘッケルに代表される大衆化されたダーウィニズム的な進化観や、人文主義的な見地からすれば、人間は動物から進化したことで、彼らと決定的な隔たりを持つ存在である。それはまた市民社会的な人間の一つの定義でもあり、市民社会の価値観によってつむがれた人間像の根幹をなすとも言えよう。このような人間観に対してユンガーは、ポレミックな言辞をちりばめて反駁する。すなわち、人間は進化によって動物から離れたのではない。それらの層にまだ残るそれぞれの生を吸い上げているのである。文明という絹の下では、このよう

な人間以前の層はくるみこまれて、意味を成さないものとして扱われてしまうが、しかしそれでも潰えることはなく、永い眠りの中にあるだけなのである、と。このように展開される思考に触れる際、示唆深いのは〈文明という絹〉というイメージである。

ユンガーは文明や市民社会に対して、しばしばガウンやマント、絹などの衣類のイメージを用いる。そこに共通するのは、〈包む〉あるいは〈くるむ〉といった衣類と密接な動詞が必然的に内包する、柔らかにして緩い限界である。市民社会の人間の生を、この限界の内側で庇護された自由を享受する生と見るならば、兵士たちの生とは、このような限界を超えた、彼らを包み込む絹の奥にある原始の力と共鳴し、重ねていく生にほかならない。

戦地で生活し、鍛錬を重ね、彼らを多かれ少なかれ支配していた、繊細にして細やかな思考という、戦場ではまったく役に立たないものを打ち壊し、思考と行動の間に広がる隔たりを飛び越え直截に繋がっていく。そうして市民社会の人間とは、また別の生を持つ優秀な兵士として彫塑されていく。戦地におけるあらゆる体験が、このような変容を促す教育として作用するが、彼らの生を覆う市民社会的な衣服をずたずたに引き裂く最大の契機として据えられているのが、以下に述べる近代戦における戦闘である。

4．戦闘、舞踏、技術

近代戦の戦闘が備える〈教育〉の作用とはどのようなものだろうか。この問題を前に、まず思いめぐらさねばならないのは、戦場という戦闘を内包する空間である。敵の姿が見えない戦いの方が圧倒的に多い近代戦において、敵味方入り乱れて打ち合う戦いはむしろ特殊なもので、『鋼鉄の嵐の中で』でも伺えるように、戦場を覆うのは静寂が支配する張りつめた時間であり、また戦闘以上に恐ろしい緊迫した夜である。夜の戦場で、兵士たちは耳をそばだてて、あらゆる音を聞こうとする。眼も耳も痛むほどにはりつめた彼らは、鉄線に触れてしまった敵が鳴らす、風音とは異なるかすかな音をも聞きわける。気配を殺し、身構えて、姿が見えるのを待つ。接近を待つ。わずかな音でも聞き逃さぬよう、肉体は一個の耳に、一個の鼓膜に変容する。そうしてはっきりした金属質の音が響き、ひとつの影が

もたげる。それを合図に射撃し、戦闘が勃発する。[26)]

近代戦が神経の戦いとも言われる所以は、決定的な瞬間を経て戦闘へとなだれこんでいく前の、このおぞましい静寂にある。神経はいやがおうにも張りつめ、過度の緊張を強いられる。肉体の疲労と神経の緊張が、ここにきて極限にまで至らしめられる。ユンガーはそこに、生の限界とされていたものを突き破る可能性を見るが、ここから伺えるのは彼にとって、戦闘もまた断層と同様の思考モデルによって形成されているという点である。かかる意味において、戦闘は一つの祝祭じみた暴発となる。戦争という「二つの民族の理念の衝突」が、ここにきて最高潮を迎えるというのもそのためである。そしてそのぶつかり合ったところから、「来るべきもの」が、それまで存在しなかった「また別のもの」があらわれる。

> 二つの現象が互いにのしかかりあい、予期せぬもの、〈また別のもの〉が身を擡げるこの瞬間が、デーモンの世界への入り口を徴づける。それは驚愕によって作用し、意識から突然足元の地面を奪い去り、墜落の感覚を、心拍の急な停止を呼び起こす。[27)]

戦闘へとなだれ込み、辺りは白熱の炎で灼きつくされる。両軍が衝突する。そのときそこに裂け目が生じ、巨大な波があらわれ、兵士たちはことごとくこの波にのまれていく。兵士たちはその流れの中で、敵も見方も判然としない一体化したかたまりとなる。殺人兵器の多用される戦いに思考をなぎ倒され、ただただ神経で動く者となって突進していく。このような戦闘を強いる近代戦において、彼らがその身に叩き込んできた軍の規律すら無意味なものとなってしまう。しかしユンガーはそれを嘆くことなく、兵士たちの内から噴出し波打つ、規律を無効にするほどに強靭なものを見

---

26) 戦闘状態への突入に関する記述は、『内的体験としての戦闘』において、実体験をふまえて半ば理論的に紡がれた描写を参考にした。Vgl. Ernst Jünger: Der Kampf als inneres Erlebnis.a.a.O., Bd.7, S.92-97.

27) Ernst Jünger: Das Abenteuerliche Herz. Erste Fassung. Aufzeichnungen bei Tag und Nacht. a.a.O., Bd.9, S.144.

て、歓迎する。

> ……そしてこの少人数の部隊をまとめるものといえば、それはただ渡り鳥の群れを支配しているような、本能的衝動だけなのである。ここにおいて（引用者註：戦闘状態を指す）規律などは、肯定的な意味であれ否定的な意味であれ、なんら役に立たなくなる……（S.89）

ここで語られる「本能的な衝動」とは、兵士が戦場で経験するような、盲目的に生を志す本能とは峻別すべきものである[28)]。それはたとえば、渡り鳥に刻み込まれた帰るべき土地の記憶のように、長い滔々とした生の流れの内に根ざしている、いわば生命の記憶に近いものだ。根源的な、あまりに根源的なものが呼び覚まされるこの覚醒の最中、兵士の内では「勇ましき心（Mut）」が横溢しているのだとユンガーは指摘する。

近代戦の戦場を克明に描写し技術の重要性を述べたて、もはや個人の英雄など通用しないことを説く作家が、前近代戦の美徳でもある勇ましき心を掲げる――たしかにこれは一見矛盾のようにも映る。しかし『内的体験としての戦闘』の中で「勇ましき心」に一章を割き、モダニストばりの過激さで技術の可能性を謳いつつ、自身を「古い時代の子」（S.102）とも述べるユンガーにとって、近代戦における勇ましき心は、ただ前時代の戦いの美徳や英雄主義の発露とは異なるものである。

戦争は変わり果ててしまったが、その「中心」には勇ましい心とも繋がる「雄々しさ」が変わらずにある、ユンガーはそう述べているが、それは訓練や規律によって培われた統制と勇気さえあれば、敵の集中砲火も突破

---

28) たとえばゲルハルト・ローゼは『内的体験としての戦闘』で描かれる兵士の生を、戦場で緊迫し、昂揚する生として、より本能じみた「生への欲求（Lebensgier）」として捉えている。ユンガーが戦争に対して肯定的なのはこのような生への眼差しがあるからだというローゼの主張は疑いようがないにせよ、この生への眼差しがユンガーを動物学へと突き動かしたことを鑑みれば、更に深く、また細やかに見ていくことが要請されよう。Vgl. Gerhard Loose, S.49-56.

できるという発想[29]とは本質的に異なる(S.53)。では近代戦の戦闘において、勇ましき心のあらわれはどのように見いだされるのか。この問いに対して、ユンガーは舞踏を例に応えている。

> 勇ましき心は舞踏と比較しうるものである。舞踏家の人格とは形式であり、副次的なものにすぎない。肝要なのはただ、舞踏家の動きというヴェールの下で身をもたげ、また沈むものである。そのように勇ましい心というものもまた、人間が永劫にして破壊されることのない諸価値を含みこんでいる、という内奥の意識の表現なのである。(S.52)

敵味方の渾然となった戦闘状態を覆うたおやかな動きの中へと入り込み、その波のリズムに自身を近づけ、重ねていく。波に呑まれ身をさらわれ、その波と一体となって、個人の人格などという卑小なものは捨て去って、動いていく。上の引用が強調するのはこのような行動の重要性であり、そのためユンガーが述べる勇ましい心とは、強敵に立ち向かい凱歌を求める心でも、名誉ある敗北を希う心でもない。それはむしろ、戦場を波打ちながら呑み込んで、うねり続けていくリズムに身をゆだね、私心を捨て去って共に踊っていくことを意味している。

戦闘と舞踏を並べて述べるユンガーの考察に、戦争の美化を見るのは容易い。だが彼はレトリックを駆使して戦争を舞踏の優美さの内へと押しやっているわけではない。舞踏が「人間が永劫にして破壊されることのない諸価値を含みこんでいる、という内奥の意識の表現」であるからこそ、勇ましき心と比肩しうる。この点を鑑みれば、そこに戦争の美化を見いだすのは、表層的な解釈どころか曲解である。舞踏のように優美な戦争があるのではない。戦争のように禍々しい舞踏があるのだ。

ユンガーの技術論は、このような舞踏論の先で展開されていく。近代戦の戦場では、兵士は武具の扱いに熟練し、戦いのエキスパートになることが要求される。上官の命を受け、何のためにではなく、いかに戦うかが問われてくる。同時に、それ以上のことが求められることはない。それは近

---

29) ジョン・エリス『機関銃の社会史』(越智道雄訳／平凡社 1993) 78 頁参照。

代戦が必要とするのが個人の英雄などではなく、組織だからに他ならない。軍隊という巨大な組織は兵士たちに、その中の一つの細胞になること、歯車になることを要求する[30]。そのため彼らは、一人の人間などではなく、「ひと山幾ら」[31]の、もはや一つの武器として戦う器官となることが強いられる。ユンガーはそれに対して、例えば彼を含みのある言い方で「戦友」と述べるアンドレ・マッソン[32]のように怒りを覚えるのではなく、それどころか諾い、組織の力を十全に発揮できるよう、永久機関のごとく動かせるよう、おのおのの立場で回転させていく存在になることの重要性を強調する。そのためユンガーの言う「新しい人間」とは、英雄的な存在どころか「ひと山幾ら」という代替可能の、人間ではもはやない一つの器官にすぎないものでもある。しかし組織の一器官という、人間以前とも人間以下とも言える存在に接近していくことで、むしろ市民社会が作り上げた〈人間〉という枠を超えた可能性が開かれるという逆説が、人間であるという限界からその極限の鍛錬によって抜け出たからこそ、人間以上のものになることもまたありうるという逆説が働く。それは兵士誰しもが可能なことではない。だが戦地の労働に従事し、戦場をいくつもくぐりぬけ、勇ましい心をはりめぐらせ、ただただ一つの器官となって戦ってゆく、ごく一部の兵士には叶いうる。そしてこの勇ましい心がもっとも冴え返り、閃くのが、決定的瞬間を経てなだれ込む戦闘なのである。なので、そのような人間以上の生、〈新しい人間〉の生を経験するのもまたそこにほかならず、極言すれば、戦場とはこのような兵士よりほか、わたりあうことのできない空間とさえ言えよう。肝要なのは、このとき〈わたりあう〉とは、〈生き延びる〉ことと同義ではありえないという点である。というのも死の逼迫に対し、その死に向かって突撃していく彼らにとって、生と死はも

---

30) Vgl. Ebd. S.92.

31) アンドレ・マッソン『世界の記憶』（東野芳明訳、新潮社、1977）94 頁参照。

32) マッソンは戦場について以下のように書いている。「鉄と火の激流というか、『戦友』の云い方を借りれば、鋼鉄の嵐だ。」（前掲書、70-71 頁）近代戦における兵士の存在をめぐるユンガーとマッソンの考えは対照的である。しかし戦場で体験した驚愕や恍惚に関する描写には、きわめて近いものがあることを付記しておく。

はや対立するものとして捉えられないものだからだ。二つの民族の理念が衝突するこの戦場において、噴出しすべてを飲み込んでしまう波とは、いわば死をも食らいつくし、死を内包した生の波なのである。それをビオスとゾーエという生の区別[33]から眺め、ゾーエの生、むき出しの生の噴出と横溢として捉えることもまた可能である。だが、ユンガーの捉える〈戦争の教育〉という側面を念頭に述べれば、このような剥き出しの生が波うつ戦場という空間において、個人の人格や意識など捨象し、波の荒く禍々しい力の内でそのリズムと共鳴して、浮き沈みし戦う彼らは、ただゾーエの生にひたるだけではない。そのゾーエの生、始源の生と共鳴し、一体になることで、彼のうちでずっと眠っていた人間以前の生を覚醒させうる一つの流れを、その体に巡らせて行動しているというべきであろう。生の記憶の内にまどろむ人間以前の生。人間を形作る地層に組み込まれているいくつもの生き物たち。類人猿から、果てはプランクトンまで、これらすべての生が目覚め、うごめき、躍動し、めぐりはじめる。一つの兵士の内に、共時的にあらゆる生が波うちはじめる。ユンガーの述べる近代戦が可能にした新しい人間の生とは、このような生に他ならない。彼らはそこで、自身にみなぎる生の途方もない横溢や可能性に気づき、認識し、見つめていく、そうして生の限界として規定されていたものを易々と越えて、剥き出しの生の流れに入り込める者となる。

5．結び

近代戦が技術の戦争である以上、兵士たちは軍隊という組織に組み込まれる代替可能な器官となることが求められる。彼らはこの巨大な組織の中へと喜んで参入し、個人の人格などという偏狭なものを捨て去って、戦闘の始源の波に飛び込み、リズムをあわせ、重ねつつ、踊り、戦っていく。

---

33) ビオスとゾーエは、およそ以下のように区分される。すなわち、良きギリシア市民として定義付けされた生としてのビオスと、それに対して定義を持たない、むき出しの生としてのゾーエである。また、ユンガーの生へのまなざしを、ビオスとゾーエの区分をふまえて読むにあたって、ジョルジュ・アガンベン『ホモ・サケル』（高桑和巳訳／以文社 2003）を参考にした。

このような行動から、彼らのうちに、彼らをつくりあげてきたすべての生物の生を呼びさましたとき、はじめてヒューマニズムという足かせは粉砕される。戦争の内に、戦争に従事する者として没入する。そうすることによってのみ展けてくる、閉塞した時代をやきつくす炎となりうる生のすがたがある。『内的体験としての戦闘』において兵士の姿はこのような流れで論じられていく。そしてだからこそユンガーの述べる勇ましき心を決断主義の発露として、あるいは軍人的英雄主義としてのみ捉えることは難しくなってくる。というのも、この勇ましき心とは戦闘を呑み込む流れへと飛び込む決断や覚悟として描かれているのではなく、またクロコウが述べるような、具体的な目標設定から切断され、手段から自己目的なものと化した戦闘を支える心情として肝腎なのでもない。勇ましき心は、波うつ生があらかじめ見据えられているからこそ、この近代戦の中ではじめて意義深いものとなる。そして「新しい人類」もまた、このような生と密接にある。

後年『冒険心 第一稿』の中でユンガーは、ドイツ国防軍を去り、ライプツィヒ大学で動物学を学んだ理由に着いて、「戦争というたぐい稀なる学び舎で、生がたぎる流れのうちに、またその極限の可能性のうちに現れ出るのを見た後に、わたしは生の持つ動物的な基礎なる部分について、また簡素にして謎に満ちた運動について冷静に知ってみたいと思ったのだ」[34] と述べている。豊穣にして泡立つ生を、別の角度から精緻に眺めるべく学問の道に入ったという告白は、同時にユンガーの作品を読む際に、生という視点がいかに重要きわまるものかを打ち明けてもいる。当時の動物学的な方法にあきたらず、またその限界を見たユンガーが、この「新しい人類」の生を分析しようと試みたとき、技術は兵士をより優れた存在にし、その生を深める装置として捉えられ、徐々に考察の中心となっていく。1926年以降の著作において先鋭化するユンガー独自の技術論は、かかる技術の分析を根底にしていると念頭に置く必要があり、そのため『労働者』までの技術論は生との共鳴から検討しない限り、結局は多分に政治思想的な分

34) Ernst Jünger: Das Abenteuerliche Herz. Erste Fassung. Aufzeichnungen bei Tag und Nacht. a.a.O., Bd.9, S.78.

析に終始する既存の文脈を離れることは出来ないだろう。

本稿は、ユンガーの政治的著作を、生の思考、生へのまなざしから読み直すための、ひとつの試みである。

（慶應義塾大学大学院後期博士課程在学中）

Wo sich das Leben wellt

UCHIDA, Kentaro

Der Erste Weltkrieg ist für Jünger wie auch die anderen Zeitgenossen ein prägendes Erlebnis: Dieser Krieg bedeutet das Ende der bürgerlichen Zeit. In Jüngers zweitem Buch, „Der Kampf als inneres Erlebnis“, das 1922 publiziert wurde, findet sich dieses Thema noch stärker als in seinem ersten Buch, „In Stahlgewittern“. Diese Essays, die auf Grund der Erlebnisse im Krieg geschrieben wurden, zeichnen sich durch die dem Jünger eigentümliche Rhetorik und ihren deutlich ideologischen Inhalt aus. Deshalb wurden diese zwei Werke von jeher und häufig als Paar betrachtet: das erste Werk sei als genaue Aufzeichnungen des Kriegs zu interpretieren, das zweite als Versuch einer Analyse der psychischen Wirkung sowie als Darstellung der anthropologischen Bedeutung des Krieges. Zwischen den beiden sind jedoch die ideologischen Unterschiede zu erkennen.
Vom politischen Aspekt aus markiert sich der Unterschied schon deutlich. Der deutlichere Unterschied liegt jedoch in der Betrachtung der Technik. In „In Stahlgewittern“, wo die Erlebnisse und der Alltag des Kriegs wie in den Tagebuchnotizen nüchtern betrachtet werden, spielen bei der Betrachtung die modernen Waffen keine bedeutende Rolle, sondern werden nur als Ausbruch der wahren Gewalt gehandelt.

Im Gegenteil dazu kommt das Thema ‚Technik und Mensch im modernen Schlachtfeld‘ erstmals in „Der Kampf als inneres Erlebnis“ vor. In diesem und darauffolgenden Werken Jüngers wird dieses Thema nach und nach ausführlich analysiert und gipfelt in „Der Arbeiter“, das oft als Jüngers wichtigstes Werk betrachtet wird.

Bezüglich Jüngers Ansichten zur Technik ist die Vorstellung des ‚neuen Menschen', dass dieser nur durch den modernen Krieg geschaffen werden kann, besonders wichtig zu nehmen. In der Tat ist auf den ‚neuen Menschen' als das Urbild Jüngers Begriff des Arbeiters bereits hingewiesen worden. Jedoch ist diese Vorstellung bisher nicht ausführlicher behandelt, weil Jünger häufig nur unter Berücksichtung der politischen Aspekte gelesen wird. Jüngers Diskurse über den heroischen Militarismus, die konservative Revolution und den Begriff der Entscheidung Carl Schmitts lassen sich damit leicht verbinden. Mein Aufsatz zielt auf die erneute und präzisierende Betrachtung dieser Vorstellung ab.

Nach Jünger sei der neue Mensch jener, der über die menschliche Grenze treten kann, die von der bürgerlichen Gesellschaft bestimmt ist. Jünger erklärt dies mit dem geologischen Metapher der Erdschicht, wonach die Bürger von dem Elementarischen und dem Wesentlichen, mithin auch vom abenteuerlichen Herz, abgetrennt sein sollte. Unter diesem Gesichtspunkt ist der Krieg ein Beispiel dafür, wie die bürgerliche Erdsicht zerstört wird: Die Freiwilligen kämpfen mit den modernen Waffen und verharren angespannt im Schlachtfeld. Durch dieses Leben, das vom bürgerlichen Alltag stark abweicht, verändern sich die Kämpfenden allmählich. Weil Jünger einerseits diese Entwicklung oft betont, andererseits die Wichtigkeit der modernen Waffen unterstreicht, wird er als heroischer Militarist sowie kriegseuphorischer Modernist wahrgenommen. Aber der veraltete Begriff des Mutes wird in diesem Werk auch wichtiger bewertet. Hierin liegt die Schwierigkeit, Jünger zu lesen. Beim Text „Der Kampf als inneres Erlebnis" als einem Lehrbuch für die Ausbildung zum neuen Menschen geht es darum, dass die Freiwilligen im modernen Schlachtfeld heroisch kämpfen. Jünger erklärt den Mut als den mit dem Tanz vergleichbaren Ausdruck des tiefsten Bewusstseins. Fernerhin vergleicht er den Mut der Freiwilligen mit dem Instinkt des Zugvogels, der den Weg über Meer weder lernt noch vergisst. Dieser Instinkt unterscheidet sich von der Gier nach dem Leben und versucht vielmehr, das Elementarische zu entdecken: Im modernen Krieg überschreiten die Freiwilligen die bürgerlichen Grenzen des Menschen und treten in das Gebiet des nackten Lebens ein. Dass sie auf Grund dieses Lebens handeln und, um es metaphorisch zu schildern, im

Schlachtfeld tanzen können, ist die wahre Bedeutung des Jüngerschen Begriffs des Muts. So unterscheidet dieser Mut von C. Schmitts Begriff der Entscheidung, weil der Mut hier nicht als reiner Zweck erscheint, sondern als ein notwendiges Mittel für den Grenzübertritt.

Im unerbittlichen Kampf des modernen Kriegs betrachtet Jünger eine paradoxe Möglichkeit: Nur diese unmenschlichen Situation kann einen neuen Menschen schaffen, der ein Träger der neuen Zeit sein soll.